

福島第一原子力発電所現地確認報告書

1 確認日

令和6年12月23日（月）

2 確認箇所

新事務本館3階 会議室

3 確認項目

作業点検及び共通要因分析を踏まえた取り組みの実施状況

4 確認結果の概要

福島第一原子力発電所では、昨年10月に発生した「増設ALPS配管洗浄作業における身体汚染^{*1}」や本年2月の「高温焼却炉建屋からの放射性物質を含む水の漏えい」さらには、本年4月の「大型機器点検建屋西側における掘削作業による所内電源A系停止」など、所内設備に関するトラブルが連続して発生したことから全作業を停止した上で一連の作業点検を行い、総数約1,000件のうち7割に当たる約680件の防護措置を改善してきた。

その過程の中で、①リスクアセスメントの強化、②脆弱性調査に基づく設備・手順書の改善、③リスクアセスメント教育によるリスク因子に基づく分析手法の浸透、④危機意識を高める安全教育の強化や⑤CRの更なる活用など、作業点検及び共通要因分析を踏まえた取り組みを進めてきていることから、本日は、③の項目として社内工事監理員を対象としたリスクアセスメント強化（現場管理）のための教育研修会の実施状況を午前～午後にわたり確認した。

なお、当該研修の対象者は、同一日の午前・午後とも受講すべき設定となっている。

<午前：安全・品質管理(HPT^{**2})研修>

- ・作業点検の際に確認された事例について、グループによるリスク抽出方法の改善点などについてディスカッションが行われた。
- ・事前リスクアセスメントをはじめ、安全事前評価～事前検討会、作業前安全点検、KY活動(TBM^{**3}、アフター)、HPT(ヒューマン・パフォーマンス・ツール)の活用事例など安全や品質向上に向けた各自の経験例を基にグループ内で議論された。
- ・各グループの好取組の事例を参考に各自の“気づき”を日々の作業安全及び品質向上へ繋げることを目標にしている。

<午後：リスクアセスメント強化研修>

- ・当該研修は危険源の特定に始まり、それらを端緒に発生するハザード顕在化のシナリオ想定と本質的・実効性ある対策を考えるなどの基礎知識の習得や実践スキルの向上を目指すものである。
- ・実際に作業に当たる作業関係者とのリスクに係る活発な議論を工事監理者の立場でどう進めてゆくべきか、さらには、残留リスクの認識をどう把握し、作業員全員が残留リスクも理解した上で安全に作業に当たるためにどうすべきかを理解させるもの。

※1 増設ALPS配管洗浄作業における身体汚染：令和5年10月25日、増設ALPS（B系）において、クロスフローフィルタ出口配管内の洗浄作業（配管内を硝酸で洗浄し炭酸塩を除去する作業）を実施していたところ、洗浄廃液を移送していた受入タンク内から仮設ホースが外れ、近傍で作業していた作業員に洗浄廃液が飛散した。洗浄作業に携わった作業員5名のうち4名に身体汚染が発生した。

※2 Humann Performance Tool：東京電力HDが所内設備の保守管理や工事元請などの協力企業とのパフォーマンス向上を目指すため設置された協議会（福島原子力企業協議会）において安全や品質管理の向上を目的に行われるツール類

※3 TBM（ツール・ボックス・ミーティング）：作業開始前に行う打合わせのこと。「ツール・ボックス＝道具箱」の近くで行われるため、このように呼ばれている。

5 プラント関連パラメータ等確認

本日確認したデータについて、異常な値は確認されなかった。